

文士から実業家へ

——佐佐木茂索の生きた道——

鳥居 玲

昭和一〇年、芥川龍之介賞（以下、芥川賞）は直木三十五賞（以下、直木賞）と共に産声を上げた。その宣言は、『文藝春秋』昭和一〇年新年号に掲載されているので、芥川賞に関する部分を全文引いておく。

芥川・直木賞宣言

- 一、故芥川龍之介、直木三十五両氏の名を記念する為茲に「芥川龍之介賞」並びに「直木三十五賞」を制定し、文運隆盛の一助に資することとした。
- 一、右に要する賞金及び費用は文藝春秋社が之を負担する。

芥川・直木賞委員会

芥川龍之介賞規定

- 一、芥川龍之介賞は個人賞にして広く各新聞雑誌（同人雑誌を含む）に発表されたる無名若しくは新進作家の創作中最も優秀なるものに呈す。
- 二、芥川龍之介賞は賞牌（時計）を以てし別に副賞として金五百円也を贈呈す。
- 三、芥川龍之介賞受賞者の審査は「芥川賞委員」之を行ふ。委員は個人と交誼あり且つ本社と関係深き左の人々を以て組織す。
菊池寛・久米正雄・山本有三・佐藤春夫・谷崎潤一郎・室生犀星・小島政二郎・佐佐木茂索・瀧井孝作・横光利一・川端康成（順序不同）
- 四、芥川龍之介賞は六ヶ月毎に審査を行ふ。適當なるものなき時は授賞を行はず。
- 五、芥川龍之介賞受賞者には「文藝春秋」の誌面を提供し創作一篇を発表せしむ。

また、同誌面には「芥川・直木賞細目」と題し、両賞の詳しい性質が説明されている。

芥川龍之介、直木三十五の二巨星の名を以てする我社今回の企ては、挙げて優秀なる新人の出現と、その活躍を待望助長するにある。

年と共に台頭の機会の失はれ行く今日、新人群の為此恒久的な企画が何物かを寄与する所があるならば、我等の欣懐之に過ぎたるものはないのである。

右の主旨を一層強め、無名新人の蹶起を従憑する意味で、「芥川・直木賞規定」に就て詳説する。

各地同人雑誌に所属する作家たちの力量に大いに期待すると同時に、別項発表の規定を設けて特に一般無名作家の登場を切望する。之は「直木賞」の場合も同様募集規定を発表したから参照されたい。「芥川賞規定」第一項中に「創作」とあるものは戯曲をも含む。又「直木賞規定」第一項中に「大衆文芸」とあるのは題材の時代や性質（現代小説・ユーモア小説等）その他に、何等制限なき

意味である。第一回の受賞者が、他誌から選ばれても、勿論結構であるが、何か残念な気がしないでもない。本誌及び「オール讀物」誌上に発表した無名新人の作品に素晴しいものがあつて、之が受賞の栄冠を獲得することでもなれば一層愉快な事だと思ふ。奮闘されたい。尚受賞者が規定第五項に依つて、「文藝春秋」「オール讀物」に改めて作品を発表する場合は、別に相当の稿料を呈する。

芥川龍之介はその作風が純文学であつた。一方直木三十五は『文藝春秋』誌上にゴシップ記事を載せていたり、大衆文学作家として名を知られていたりした。こうした理由から、芥川賞は純文学、直木賞は大衆文学のそれぞれ優れた作品に授与されるものとなつた。

芥川賞・直木賞が他の懸賞小説と一線を画して¹⁾いたのは、すでに同人誌等に載っている作品が選考対象になるといふ点である。並行して、「特別創作原稿募集」と称し公募も可としていたが、そちらの応募はほとんどなかったという。予選に残す作品・作家を選ぶのは芥川賞委員であり、中で

もその役を担ったのは瀧井孝作であったという。「第一回芥川賞選評」において、瀧井は次のように述べている。

久米さん曰く、見渡したところ瀧井が一番閑がありそうだから一応瀧井が読んでみた上で芥川賞の候補者を何人か選出してもらって、その選出した作を委員が皆んなで読んできめることにしようじゃないか、文藝春秋の社内では凡そ三十人位選んでその中から瀧井に十人位選抜いてもらって、これを委員で読むことにしようじゃないか、と云われた。そしてぼくは三十人位の中から十人位の候補者を選ぶことを托された。(中略)

こんどの候補者選出の責任はぼくにある。この五人のほかにもっとよい候補者があつたかも知らない。もし洩れていたらぼくの識見の至らない点で、はなはだ相済まないことだと思ひ、ひたすらお詫びするわけだ。⁽²⁾

このような、ある意味で大変恣意的な選考方法でありながら、芥川賞が成功し得たのは、生前の芥川・直木両氏の功績の大きさもさることながら、菊池寛を筆頭とする選考

委員の文壇としての位置の重要性、そして何より『文藝春秋』それ自体への信頼が大きかったのであろう。それは、着実に読者を増やしていることからもうかがい知ることができる。『文藝春秋』には芥川の「侏儒の言葉」が毎月掲載されていたため、彼の晩年にあつて彼の文章を得ることのできる貴重な雑誌としての認識が、『文藝春秋』の発展を後押ししたともいえる。だが、芥川の没後、芥川賞・直木賞の制定までに約八万部増刷していることから、決して芥川だけに拠つたのではない『文藝春秋』の高品質さがわかる。

しかし、雑誌『文藝春秋』と芥川賞の成功は、内容面の質の高さもさることながら、やはり経営基盤にあると思う。その基盤を整え、芥川賞の成功に大きく貢献した人物、それが佐佐木茂索なのである。

『文藝春秋』そして芥川賞を語る時、菊池寛の存在は避けて通れない。それと同時に、菊池の弱点を穴埋めし、今日に至る発展に大きく貢献した人物として存在した佐佐木のこと、無視してはいけけないのではないだろうか。万人の目を惹く菊池の功績ばかりを祭り上げては、『文藝春

『秋』と芥川賞の発展の根本的な部分のみえてこないと思うのである。

本論では、菊池と佐佐木の在り方を比較することを主とし、同じように芥川と親交のあった人物がどのような思いで芥川賞の制定に携わり発展させたか、その違いを考察していく。佐佐木の存在は菊池の陰に隠れているが、菊池が誰もが認める大人物であったがゆえにそのようになっていくのであり、佐佐木の存在は必ず光を当てるべきものだと考えるからである。

一 芥川 の存在意義——菊池寛にとつての『文藝春秋』

菊池は、「半自叙伝」において自身の生い立ちなどを詳しく書いている。これは、昭和三年五月から昭和四年一二月まで、『文藝春秋』で連載されたものである。後に『新潮』でその続きを書いているが（昭和二年五月〜六月）、「自分の「半自叙伝」は、芥川と一しよに長崎旅行をしたことを以て、筆を擱いてゐる」とあるように、『文藝春秋』誌上で一応完結しているとみてよい。この執筆が芥川の死後二年

をおかず始まっていることから、芥川の死が菊池に影響したといつてよいだろう。冒頭を引用する。

自分は自叙伝など、少しも書きたくない。自分の半生には書くだけの波瀾も事件もないのである。また私は久米や芥川などと比べて、具象的な記憶に乏しい。たゞ、「文藝春秋」に何かもう少し書きたいため、自叙伝的なものでも書いて見ようかと思ふのである。私は、少年時代の出来事を記述などはしない。思ひ出すことを、順序なく書いて見ようかと思ふ^{〔4〕}

『文藝春秋』は、当初どのような意図によつて創刊されたのか。それは、菊池による「創刊の辞」に端的に著されている。

私は頼まれて物を云ふことに飽いた。自分で、考へてゐることを、読者や編集者に気兼ねなしに、自由な心持で云つて見たい。友人にも私と同感の人々が多いだらう。又、私が知つてゐる若い人達には、物が云ひたくて、ウ

ツ／＼してゐる人が多い。一には、自分のため、一には他のため、この小雑誌を出すことにした。⁽⁵⁾

つまり、菊池は自分の書きたいことを書く場として『文藝春秋』を作ったのである。もちろん、菊池自身述べているように「他のため」という要素もあつたであろう。しかし、「頼まれて物を云ふことに飽いた」というのは、いかに菊池らしい発言である。大正一二年当時、菊池はすでに文壇では相当な位置にいたが、それでも『中央公論』に「無名作家の日記」を発表したのが大正九年であつたことを考えると、たつた三年で「飽いた」とは、大変大胆な発言である。しかし、だからこそこれが本音だといえるのではないだろうか。

そもそもがこのように個人的な意図から始まつた『文藝春秋』であるから、菊池には書かない自由もあつたはずである。「少しも書きたくない」自叙伝など、本来ならば書かなくてもいいはずなのである。それでも菊池は一年以上も「書きたくない」ものを書きつづけたのである。そこには先に述べたように、芥川の死の影響がある。しかし、その

影響は決して感傷的なものではない。

芥川の死に際し、菊池は編集後記に次のように書いてい

る。
▽芥川の死は本誌にとつても可なりな打撃である。本誌には、殆ど毎号欠かさずに書いてくれた。「侏儒の言葉」乃至それに代る物ののらなかつたときは、絶無と云つてもよいだらう。

▽記念の意味で、同名の欄をつゞけて、故人の遺稿をのせて行きたいと思ふ。

▽今月号に載せた「十本の針」は、死直前のもの。「關中問答」は、昨年末若しくは今年初のものだらう。いづれも、彼の死を頭に入れて読むと、託されたる遺書と云ふべき、大切な文献であらう。⁽⁶⁾

▽雑誌界の不景気につれ、本誌も売行きがよくない。それに、五、六、七と毎月三十銭に売つたので、月々三千円前後の欠損となつたので、驚いて八月号を三十五銭にして見たわけである。しかし、その結果は分らない。

▽しかし、秋になるとよくなるのは、毎年の例だから、九月からはよくなつてゐるだらうと思ふ。殊に、芥川の遺稿が載つたし、相当売れただらうと思ふ。「闇中間答」は、一番遺書的なものではないかと思ふ。

『文藝春秋』の編集後記をみる限り、芥川を失つたことをかなり損益勘定で記述しているように感じられる。芥川の死は文壇全体に大きな衝撃を与えたが、菊池にとっては『文藝春秋』の看板作家がいなくなったことの方がよほど衝撃だつたといえる。そのため、死後は遺稿を載せ続けることにより、『文藝春秋』の損失を補填しようという素早い対応策をとつていたのである。

このように芥川の死に対して菊池はとても冷徹に反応しているようにみえるが、それは菊池と芥川のそれまでの關係をみると理由がわかるのではないだろうか。二人が出会つたのは、「菊池寛年譜」によれば明治四三年九月、菊池が第一高等学校第一部乙類（文科）に入学した時であつたといふ。その同級に芥川がいたのである。しかし、在学中はそれほど親しくしていたわけではなかつた。菊池の「半自

叙伝」には次のようにある。

その頃、私の作家としての生活は、中断してゐた。「新潮」はその年の正月に休刊してゐた。芥川や久米などは、もう原稿の注文があるので、同人雑誌はいらなかつた。

（中略）

私は、芥川と此の頃漸く親しくなつた。一高時代は、芥川は、恒藤恭君などと、官僚的秀才であり、私は久米などと野党的秀才であつたので、一高在学中は殆ど親しく口をきいたことはなかつた。大学になつてから、私が上京する度に、よく会つて親しみを増したが、この頃になつていよ／＼親しくなつた。

これは前出の年譜に照らしてみると、大正六年のことをいつているのだとわかる。つまり、菊池は芥川と出会つてから親しくなるまでに、七年の歳月を要したことになるのである。この間に、先に作家として名を成したのは芥川の方である。菊池が文壇としての地位を確立するのは、先に

述べたように「無名作家の日記」を発表した大正九年のことであり、またその年の六月からは、代表作となる「真珠夫人」を『大阪毎日新聞』と『東京日日新聞』に連載し成功している。菊池は純文学で大家になった芥川とは違い、新聞小説といった主に広く大衆に読まれる小説で位置を得たといえる。二人は、異なる舞台で切磋琢磨し合ってきたため、友人である前に好敵手なのである。

そのため、菊池は芥川の死を大いに利用したようにみえる策を講じたのである。菊池の信念は、「小説は広く読まれてこそ価値がある」というものである。「流行作家の弁」では次のように述べている。

その時代々に流行し、本も売れ、人にも読まれ、劇場にも上せられて、初て後世に伝はる土台が出来るのだ。

(中略)

流行作家滅び易しと云ふ。しかも、不流行作家はもつと滅び易いではないか。不遇作家に至つては、滅ぶべき何物にも、まだ居ないのである。

菊池には芥川の死後、その作品を『文藝春秋』に掲載することで、雑誌の部数を保とうとする商業的な狙いがあった。しかし、それ以上に菊池は自身の信じるやり方で、芥川の作品に文学的な価値を付そうとしたのではないだろうか。それはすなわち「人に読まれ」るようにすることであり、結果として掲載誌『文藝春秋』の売行きも上向いたのである。菊池は決して冷血漢だったのではなく、好敵手であつたからこそ、妥協しない信念の下、『文藝春秋』に遺稿を掲載するという方法を以つて餞に代えたのである。

そして、芥川という看板を失つた『文藝春秋』から読者を離れさせない工夫として、菊池は書きたくもない「半自叙伝」を載せることにしたのでないだろうか。菊池は編集後記に次のように書いている。

▽本誌もいつの間にか五周年になつた。道楽に始まつて商売に了つた形である。今では、よしたくても、僕一人の都合でよすわけにも行かないし、やれるところまでやるつもりである。

創刊時には、「原稿が、集まらなくなつたら、来月にも廃すかも知れない」といひながら始まつた『文藝春秋』も、五年経ち堂々たる雑誌に成長した。春陽堂から独立し、文藝春秋社として雑誌を出すようになった頃(大正一五年一月)から、状況は変わつてきたといえる。もはや、『文藝春秋』は菊池が書きたいものを書き、書きたいものに書かせるという個人的な雑誌ではなくなつたのである。

社にした以上は、社員を養つていかななくてはならない。芥川の死により、菊池は少なからず今後を危ぶんだかもしれない。しかし、芥川の遺稿を載せ切つた後、雑誌を続けていけないなどとなつたら、社員にも芥川にも申し訳が立たない。それ以上に、菊池の自尊心がそれを許さなかつたのではないだろうか。昭和三年一月の編集後記は、自分を切り売りしてでも『文藝春秋』を続けていくという決意に満ちている。そして何より、菊池は自分が「半自叙伝」を書くことが、読者の興味をひく程の価値があるということを負っていたのである。だからこそ、昭和三年五月に文藝春秋社を株式会社組織変更し、自身が取締役社長に就任したと同時に、「半自叙伝」の連載を開始したのである。

菊池の雑誌経営は、自身の小説と同様、広く大衆に還元すべきであるという信念の下に継続されているといえるのである。

二 編集者への道——佐佐木、文藝春秋社へ

佐佐木自身は、文藝春秋社入社当時のことを、次のように振り返っている。

私の入社したのは昭和四年の秋で、編集会議に月兩三日出勤してくれるだけでよいといふ條件であつた。私は当時作家として一応生活してゐて今さら編集者、といふ氣もあり、それに他に理由もあつて、最初は菊池氏の求めに容易に応じなかつた。だが、定収入のある方が作家生活も楽ぢやないかといふ勸説は直接間接に繰り返され、遂に入社を承諾した。往年の時事新報文芸部主任に私を推挙してくれたのも菊池氏であり、さういふ因縁恩義からしても入社は蓋し自然であつたのであらう。

佐佐木が時事新報社に入社したのは、年譜によれば大正九年一月のことであった。久米正雄の紹介で菊池を知ってから、それほど年月は経っていなかったが、佐佐木の働きぶりは菊池が推挙するほどにすっかりしていたのであろう。

佐佐木は時事新報社に大正一四年九月まで勤めていたが、その時の佐佐木のことを書いた文章がある。

六年間に亘つて、どんなに多くの新人を紹介したか、どんなに多くの問題を提供したか、少くともこの間、時事の文芸欄は、文壇的に云つて、無視出来ぬ存在ではなかつたか、数へ立てるまでもなく、この人の功績は顕著である。

(中略)

今後の佐佐木茂索さん――

私は時事退社のことが、結局この人には、作家としての存在を、いよ／＼はつきりさせて行くと云ふ意味で、多幸をもたらすことになりはしないかと考へてゐる。

少くとも、今までの茂索さんの生活には、「散歩」が少し多過ぎやしなかつたらうか。その「散歩」が、もうこ

れからは、決して他から強ひられる何ものもない、ほん¹⁾とに作家的自由さを持つたものになる。この点だけでも、今後のこの人の作家的生活は十分に恵まれるに違ひない。

この時の佐佐木はまだ『中央公論』にも作品が載らず、新進作家として評価はされていても振るつてはいなかった。しかし、この文章をみる限り、作家一本で生きていこうとする佐佐木には少なからず期待が寄せられていたようである。確かに、佐佐木にとつて時事新報社退社から文藝春秋社入社までの約五年間は、「作家としての存在」を明確にする期間になつた。この間、佐佐木は「作家としての佐佐木茂索」を見つめ直していたのである。その結果、自身の才能のなさに辿り着いてしまった。佐佐木は次のようにいつている。

作家生活を続けてゐたら、乏しい才能に苦しみぬいて若くして一生を終つてゐたかも知れない。しかも成し得たことは、直ちに忘却のかなたへ埋つてしまふ片々たる幾¹⁾つかの小説のみであつたに違ひない。

されたのである。^{〔16〕}

こういつてはいるが、佐佐木には才能がなかったわけではない。持てる才能を生かす力が足りなかつたのである。

芥川が再三彼に忠告した、根気が足りないという言葉は、まさにここに響いてくる。しかし、佐佐木は元来モダンな人間であり、これまで編集者の依頼が幾つかあつたものにはどれも断ることなくその任に就いている。佐佐木の新しいものの好きな一面が垣間みえるが、これが雑誌や出版経営には功を奏したといえるのではないだろうか。

佐佐木はそれまで、一つの文学思潮に捉われぬ作家活動を送つてきた。そのことは、ある面では佐佐木の作家としての人生を短命なものにしたかもしれない。しかし、一方では後の『文藝春秋』を初めとする実業家活動には大きく好影響をもたらしたといえる。その柔軟性は、菊池も持ち合わせていたものであつた。松本清張はいう。

横光・川端・片岡らの「文芸時代」の発刊を、彼らが菊池に反逆したようにいう噂があつた。(中略)これは間違いで、「文芸時代」は菊池の十分な諒解のもとに発刊

『文藝時代』発刊後もその同人たちは『文藝春秋』に寄稿していたことからみても、菊池は自分と主義の異なる文士たちともそれなりに親しく交際していたようである。それどころか、大正一五年には先述したとおり文藝春秋社を独立させ、『文藝春秋』は乱立した文学思潮のどれにも偏向することなく、総合雑誌として確立するのである。これぞ菊池の持つ強みであり、佐佐木もまた紆余曲折の末に辿り着いたのが、思想を廃した文学場だったのである。その二人が『文藝春秋』を変えてゆく。殊に、佐佐木の目覚ましい活躍がみて取れるのである。

菊池が文藝春秋社に佐佐木を招聘したことは、仲間内でも高く評価されていたようである。

川端 佐佐木さんが文藝春秋へ入つたのは、何年ですか。
佐佐木 僕は昭和四年か五年だな。有島邸の時分に僕が遊びにいったら、たしか百円くれてね、「君すこし手伝つてくれよ」つて言はれたな。

吉川 その頃で百円。

佐佐木 大金ですよ。しかし、その後は呉れなかった。

貰ひにもゆかなかつたけどね。ほんたうに關係したのは大阪ビルへ来てからだな。

川端 あなたを呼ばうといふのは、菊池さんの発案でせうね。

佐佐木 無論さうですね。僕は断るつもりでゐたら、家内に話をしたり、山本有三氏に話をしたりして、定収入があるほうがいいぢやないか、月に三日か四日、やつてくれればいいんだつていふんで入つたんだ。入つてみれば僕のやうな男は全部やるやうになつちやふからね。

永井 関口次郎氏をといふ腹案もあつたといふ話は、ほんたうなんですか。

宇野 僕が聞いたのは、関口次郎か佐佐木茂索か、といった時に、菊池が即座に「佐佐木だ」と言つたので、さすがに菊池君は人を見る目があるといふ話だ。

佐佐木 もう十万以上出してたからね、選挙に立つたのが昭和三年かな、それで思はぬ金を使つて、社が行詰

つて、それで株式会社にしたんだ。

永井 有島邸にゐた時は、まだ十万は出ていないんですよ。大阪ビルへいつてからです、十万越したのは。

川端 佐佐木さんの前に、鈴木氏亨さんとか近藤経一さんとか、いろいろやつてたけれども、経営はダラシなかつたんですね。

宇野 結局、佐佐木茂索が入つたんでよくなつたわけだ。これは確実なことだ。

吉川 茂索さんの才能を認めた菊池氏が偉いんだ。^(一七)

しかし、佐佐木を総編集長として招くという決断は、簡単なものではなかつたはずである。そもそも、佐佐木は雑誌の編集から離れて久しい。いくら時事新報社での働きが評価されるべきものであつたとしても、畑の違う雑誌編集のしかも総編集長の位置に据えるほど、菊池が佐佐木のことを知つていたとは思えない。そう考えると、やはり佐佐木の作家としての在り方、ひとつの思潮に偏らず、自由でそれでいてモダンな佐佐木の感覚が菊池は欲しかったのではないかと思えてくるのである。

また、芥川の死後、佐佐木が『芥川龍之介全集』の編纂委員になつていたことも、編集者への道がふたたび開く契機となつたと考えてよいだろう。小島政二郎とともに、芥川の仕事を後世に残すため、慣れないながらも時間をかけて大仕事を成し遂げたのである。佐佐木は、この頃から作家生活に不安を感じていたに違いない。そんな時に、菊池から説き伏せられた佐佐木は、自分の適性を今一度みつめなおす最大の機会を与えられたといえる。あるいは、菊池は一目みて人物を見抜くようなところがあつたというから、佐佐木の働きぶりから、彼の得手不得手をすでに見抜いていたといつてもよいのかもしれない。こうして佐佐木は、文筆一筋の生活から編集者の道へと進むことになつたのである。

三 編集者から経営者へ——大いなる転換

佐佐木の大きな活躍は、編集長としてではなく経営者として¹の道を決定づける事件となつた。それが、昭和六年の内部革新である。この当時のことを佐佐木は次のように振

り返つてゐる。

翌六年になつて社の経営が苦しくなつた。五万円ぐらゐで社の経営を誰かに譲つてもいいと菊池氏が口にしたのもこの頃である。私は肺炎で四十度の熱を出し永らく臥床してゐた。その癒りかけのところへ社員代表が数名来て社の現状を告げ、その困惑ぶりを訴へられるに及んで、まだふらつく躰で社の改革に当らざるを得ぬこととなつた。私は編集を主宰してゐるだけで何も知らなかつたが、社は少額ながら借金もあり、赤字が実状であつた。⁽¹⁾

それまで月に三、四日しか出勤せず、しかも病床に臥している佐佐木にまで窮状を伝える事態になるとは、社としては相当な危機であるといえる。なぜ入社して二年しか経つておらず、経営に携わつていたというわけでもない佐佐木に、社の建て直しを依頼したのか。ここに佐佐木の異色の経歴が生きてくるのである。

菊池は編集後記で次のように述べていたことがあつた。

▽社には科学方面の知識を持つてゐる人、経済学方面の知識を持つてゐる人がないので、さうした人で文筆の才(19)能ある人があれば、入社して貰つてもいゝと思つてゐる。

文藝春秋社には、経済に明るい人間が欠けていたのである。菊池の個人資産により始まり、株式会社になるまでは収支も混同していたようなやり方だったのだから、このような人材不足もなすける。佐佐木は、「経済学方面の知識」を買われて入社したのではないが、偶然にもその穴を埋める役割を担うことも出来る経験があつた。

一〇代の半ば頃から佐佐木は朝鮮に渡り、香港上海バンキング・コーポレーションという金融関係の職場に勤めていた。清張は次のように書いている。

佐佐木茂索はこの英国系銀行に高等小学校を卒えた十六歳から徴兵検査をすぎた二十一歳ごろまで約五年間働いていたのだが、彼自身はこの朝鮮時代のことを語っていない。おそらく机も与えられない給仕のような仕事をしていたのであろう。この低い履歴を自伝から避けたと

ころに茂索の自尊心がみえる。(20)

この時期のことは推測の域を出ないが、佐佐木が漢文や英語、独語を独学で必死に学んだのは、香港上海バンキング・コーポレーションでそれなりの任に就くためであつたと思われる。ただでさえ、佐佐木は高等小学校卒という経歴しか持ち合わせていなかったのである。実家も倒産し、自身の生計は自分で立てなければならぬ状況下であつて、金融関係の職場に勤務していたのであれば、独学であつても経済に関して多少は勉強したと考えるのが自然ではないだろうか。この実地の経験は、菊池を初めとする誰もが持つていなかった佐佐木独自のものであつた。内部革新にあたり、社員たちは佐佐木のこの経歴に望みを託したのである。

かくして、佐佐木は経営者への道を歩み始めるのである。先の対談で、「入つてみれば僕のやうな男は全部やるやうになつちやふからね」と振り返つていた佐佐木だが、その言葉通り、佐佐木は文藝春秋社の全てを取り仕切るようになってゆくのである。文藝春秋社は走り出したばかりであつ

たが、この先より大きく発展してゆくであろう可能性を佐佐木は感じていたのである。全部やるようになるのを覚悟の上で、佐佐木は菊池の要請を受け入れたのである。それは思うように書けず、師であつた芥川も失つた佐佐木が、文学史に爪跡を残すための覚悟だつたのではないだろうか。

文藝春秋社広告部の不正摘発の翌年、佐佐木は文藝春秋社専務取締役就任している。これは明らかに佐佐木の経営者としての能力の高さを認められてのことである。内部改革の詳細については、菊池も佐佐木も多くを語ることはしていない。社の不祥事をできる限り表に出さないようにしていたのであろう。後に佐佐木が語っているその語り口も、謙遜を前面に押し出し具体的な内容は曖昧なままにしている。

(嶋中) しかし、傾きかけた出版社を建て直すことは、余程、これ、經理に明るくなければ出来ないこととて……

佐佐木 いや、これは非常にプリミティブな經理ですね、ええ。例えば「文芸春秋」建て直す。一応計算して

みましたね。そうすると、その時の計算では三分です、三分支出が減ればトントンになる。そすこの三分減らそうじゃないかと。ということになるとですね。紙をもう三分引いて呉れと。月給も三分引こうと。印刷屋も三分引いてくれと。宣伝費も三分減らそうと。何もかもそういうようなことでやつて行く。

(池島) (笑)

佐佐木 目の子算的な、大福帳的なやり方ですね。これをしても、經理に明るいというならですよ、おはじきしている子供と雖も經理に明るいと言える……(笑)

小島征二郎の「佐々木茂索」に記述があるが、確かに佐佐木はこのようなやり方で社内での節約を全面的に推し進めていたようである。

例へば、社員が昼食にお蕎麦を取る、その時蕎麦屋に電話で注文する。その頃、蕎麦は八錢だつた。電話賃が三錢。

「君達は、結局十一錢の蕎麦を食つてゐるのだ。八錢の

蕎麦は八銭で食ひたまへ」

佐々木はさう云つて、電話賃の節約を命じた。²²

なんとも緻密で神経質な佐佐木の性格がうかがえる。だが、このやり方を堂々とできるだけの正義感ともいふべき勇氣は、高く評価すべき点である。佐佐木は、社長である菊池の代わりに、悪役を買つて出たのである。この頃から、佐佐木は菊池の右腕として経営の手腕を余すところなく発揮し始めたのである。

経費の節約にとどまらず、原稿料が支払われないという事件が発覚し、佐佐木は広告部の不正を摘発した。この件に関して、小島は次のように振り返る。

文藝春秋社内に、俗に云ふ「頭の白い鼠」が三匹ゐた。

小林秀雄が菊池を評して

「障子を明けて入つて来ただけで、そこにゐる人物の性格を見抜く目を持つてゐる」

と云つた程の男だつたが、「三匹の頭の白い鼠」を信用してゐたから、彼らの悪事を見抜けなかつた。三匹の鼠

がどれ程の穴を明けてゐたのか、私は知らない。

ただ「文藝春秋」に何を書いて、原稿料をくれなくなつた。書いたものが雑誌に載る、さうすると、雑誌が出ると、その月のうちに原稿料をくれるのが常識だつた。それが待つてゐても、原稿料が出ない。

(中略)

いくら云つても、菊池は「頭の白い鼠」の存在を認めようとしなかつた。²³

経営者としてではなく一人の人間として、菊池は「頭の白い鼠」の存在を認めたくなかつた。その信頼の根拠は、一人は病院の息子で一人は有名財閥の親戚、もう一人は自分の長い間の恩顧に対し、背任的な行為はできないはずだからという、およそ理由にもならないものであつた。しかし、菊池は本気でそう思つていた。それまでの井勘定の経営を含め、このようなひどく人間臭い菊池の性格が魅力であると同時に、社の経営には大変な損失をもたらす弱点だつたのである。

清張の記述によれば、内情は次のようなことであつた。

当時広告部にいた三人の社員は、いわゆる「入り稿」
「出し稿」とも任されていたことはもちろん、広告料ま
で自分のところで自由に出入を操作していた。そして経
理部に入れるべき金を着服し、「入り稿」に対して支払
うべき金も経理部から自分らがうけとり、それを中間で
抜いていた。(中略)経理部もまた彼らと内通していたら
しい。^{〔24〕}

明らかな不正が行なわれていたにもかかわらず、菊池は
無意味ともいえる信頼でそれを見逃していた。菊池は鋭敏
な感覚を持っていたけれども、経営者としては情を優先し
てしまう一面があり、今後の文藝春秋社の発展の大きな障
害になる危険性を孕んでいたのである。

一方佐佐木は、情だけでは組織はどうもできないこと
を、勤め人の経験から身をもって知っていた。会社の不利
益になる人間は、非情でも切り捨てなければならぬ。佐
佐木は菊池に代わり、それを実行したのである。その時の
ことは、次のように記録されている。

社内改革の容易ならざることをひそかに説き、編集部全
員の決意を盟わしめた佐佐木茂索は、数日中に広告部の
内部を審さに調査、続いて経理部全面の摘発材料を入手
した上で、はじめて社長にこれを報告し合せて編集部の
熱意を伝えた。

広告部全員の馘首を皮切りに、社内肅清のことは経理
部に及んで急速に実現したが、改革はむしろその後が始
まった。紊乱した財政立直しのためには、全社員給与の
三カ月間半減の非常処置が取られ、返本冊数の詳細な調
査、使用済みの凸版銅版などの計量調査と、古紙、古金属
売却等の末端にまで厳密に整理の手を入れ、広告収入の
ためには、古参社員が取扱いの分担を定めて広告主を歴
訪し、広告部の事務を兼ねることにした。

佐佐木茂索の改革は、速かに効を奏した。社員給与が
旧に復するのに、三カ月を要しなかつたのもそれは分
明だが、改革の成功は寧ろ社風の緊密化にあつた。^{〔25〕}

これまで小島が調査を依頼しても取り合うことのなか

つた菊池が、社内改革の許可を出したのは、佐佐木の完璧に近い調査と材料収集の賜物である。菊池を動かすに足るだけの不正の証拠を、佐佐木は数日で並べ立ててみせた。

まさに、「全部」やるようになってしまったのである。社員に裏切られる形になった菊池であったが、社を建て直したことで佐佐木の手腕を認め、佐佐木に対する態度に変化が表れる。

菊池は明言はしないまでも、次のようにいつている。

社も昨年末（昭和六年末——引用者注）に、内部的にいろく改正を行ひ、これまでの冗費が節約され、月に二三千円は経費が少くなつたから、今年は非常によくなると思ふ。さうすれば、来年の新年号は安く売れると思ふ。⁽²⁶⁾

これが佐佐木による不正摘発を受けて行なわれた内部革新のことを指していることは明らかである。これを機に、『文藝春秋』はさらに良くなるという菊池の、佐佐木への信頼が読み取れる一文である。それは、菊池自身の経営面での弱点ともいうべき特質を、佐佐木が見事に補う格好に

なっていたことで、相乗効果が生まれたといつてよい。佐佐木は次のように述べている。

佐佐木 あいつは十万元の財産があるよ、と、だから十万元までは信用して大丈夫さ、十万元まで金を委しなくても大丈夫だよ、と。（中略）

佐佐木 ところが、相手が十万元あつてもですね、それが九万五千円までは不動産かも知れんのだな。どうにもならんかも知れんわけだが、そんなことは別に計算に入れないわけだな。そういう大掴みな割り切り方という風なもの、あの人の人に愛されるような面であると同時に、実生活に、ま、仕事の経営ツてな場合には、ひとつとすると危ういという半面を持つていたと思うんですね。⁽²⁷⁾

表向きの好感や威厳は、菊池が生まれ持った天性の才能のようなものであつた。佐佐木は、菊池のこうした長所を残しつつ、短所の穴埋めを陰ながらきちんとこなしてきたのである。一方で、佐佐木は菊池の長所を利用するというしたたかな一面も持つていた。

佐佐木 (中略) 誰の月給を決めるのも私だから……だから私の月給を上げたわけです。(笑) 菊池寛はその社であんまり働いていない……(笑) 社長でも僕より安くツて当り前だつて思つて安くしたわけです。

(池島) 文句言わなかつたですか。

佐佐木 文句言わなかつた。(中略) 実際収入は、彼の方が多いですよ。だけど、そこが僕の筋の通し方なんだな。月給の面だけでは僕の方が働いてるんだから上だということ、多かつたでしょう。だから当時、戦争前で、僕の月給が千円くらいだったかな、菊池は八百円くらいでね。(笑)

この佐佐木の独断に菊池がひとつも文句をいわなかつたのは、それだけ佐佐木が綿密に自身の職務を全うしていたからであろう。単に社長だからという理由で、社内でも最も多い給料をもらうということが、理に適っていないことは誰もが思うことかもしれない。しかし、その疑問を追及し正した佐佐木は菊池の性格を良くわかつていたといえる。

また、経営に關して社をより良くするための行動であれば、菊池は納得すると考えたのであろう。

こうして、菊池と佐佐木という、名主役と名脇役のコンビは關係を深めていった。それに伴い、文藝春秋社の業績は好調に伸びていく。菊池は佐佐木に關しての評価や発言はほとんど残していないが、その少ない言葉の中に、厚い信頼が読み取れる。

昭和七年一月から、社内の組織を一新し、佐佐木君が経営の衝に當ることになつてから、基礎漸く堅く、爾來五年間に、内容が急激に改善充實された。不良資産などは、營業狀態の堅実なることは、どんな大会社に比べても遜色がないであらう。

(中略)

僕が、文學者として、どれだけ価値のある人間かどうかは、後世の批判を待つ外はないが、しかし雑誌経営者としては確に成功したと自信してゐる。社員相和しいづれも、仕事を樂しみ、よく遊びはするが、しかしカン所をはずさず、他の雜誌社の半分位しか働かないやうでは

あるが、雑誌は少しも遜色がないのは、社中才人に乏しくないためかと思ふと、社長たる僕も、亦甚だ愉しいのである。専務佐佐木茂索は、僕の放漫やりつばなしを引き締めてくれる適材であるし、久米、山本、小島、吉川、横光、川端、その他の知友は何かの時には、力になつてくれるし、甚だ安心なものである。

社内の人間に関してのことを普段あまり口にしない分、菊池のこの言葉は大変意味を持つていると思う。最小限ではあるが、菊池から佐佐木への最大の評価がここにある。後に、文藝春秋社解散が決まった時、佐佐木は解散に反対した。佐佐木が新社設立の了解を求めに菊池に会見したとき、菊池は「君がやるなら引継ぎも円滑でよい」と快く了承し、佐佐木はそれから一〇日あまりで新社創立と『文藝春秋』続刊の下地を整えたのである。^{〔3〕}一社を譲るような真似を平然とやつてのけるのはさすが菊池といふべきかもしれないが、やはり相当の信頼がなければできないことである。

このような二人の力が結集し、文藝春秋社の一大プロジ

エクトとして始まったのが、「芥川賞」と「直木賞」であった。次章では、芥川賞に関して、佐佐木がどのような意識で制定から関わり、存続させてきたか、そして選評から読み取れる佐佐木の思いを分析する。

四 芥川賞の制定——文学場を整えた佐佐木の功績

菊池の弱点を補う形で佐佐木が文藝春秋社内で経営を指揮し、菊池の高い信頼と評価を得てきたことは前章で述べた。しかし、それは菊池だけが感じていたものではない。特に芥川賞に関しては、他の同胞からも高い評価を受けている。

佐佐木の陰の実力を認めていたのは、菊池だけではない。永井龍男は佐佐木との対談の中で次のように語っている。

（芥川賞、直木賞が今日に及んだのは——引用者注）佐佐木

さんが実によく管理されたということ、日本文学振興会が実によくやったことですね。僕はほとんど佐佐木さんの下でコヅキ回されてやったわけですが、これ

いいな、と思っていると、佐佐木さんに突っつかれるんだな。事務に手ぬかりがあるんだな。口惜しくてね。こんどこそはと思っていると「これはどうしてるんだ」といわれる。その繰返しでしたよ。世間から見ると、文藝春秋社がやっていたんじゃないかというけれども、そういう甘いことでは、今日までつづかなかった。これを守りたてて、どうしてもやってゆくんたということであれば、菊池さんの仕事も今日まで残らなかつたし、日本文学振興会の仕事も残らなかつたわけですね。これは佐佐木さんの努力ですね。³¹

また、宇野浩二も芥川賞の選考方式を挙げた上で、次のようにいつている。

文藝春秋社は、まづ、一般の文学者に、百数十通の封書（後には往復葉書）をもつて、その年の上（あるひは下）半期の間の数十の同人雑誌に出た新進あるひは無名作家の作品の推薦を求める、さうして、それらの集まったものを「芥川賞回答表」として、たしか、謄写版で摺つたもの

を各委員にくばる、すると、各委員は、その「回答表」これ³²に出ている作品の中のコレと思ふ作品に印をつける、さうして、その委員たちが別別にシルシをつけたものをまとめて、「芥川賞参考カアドに依る候補作品」に出てある作品を、それぞれ、読みなほす、その後で、詮衡委員会がひらかれ、その会で、各委員が討議をした上で、授賞作品が決められる、（中略）（猶、これは、私の憶測ではあるが、菊池が、此案を立て、この方法を作る時、すぐれた綿密な頭の持ち主として知られてゐる、佐佐木茂素が、補佐をして、大いに為めになつたのではないかと、私は、思ふのである。）³²

菊池のことを近くでみていた者からすれば、その功績の陰に必ず佐佐木の存在があることは周知の事実であり、永井のように佐佐木がいなければ「菊池さんの仕事も今日まで残らなかつた」と考える人間も少なくなかつたのである。

一見すると、豪快な菊池が緻密に文藝春秋社の経営面を取り締まり、芥川賞・直木賞も故人の功績を称えそれを記念する文学賞という位置づけで綿密に形式を整えたかのよう³³に思われる。しかし、その裏では常に佐佐木という秘書的

な存在が不可欠だったのである。菊池と佐佐木の関係があったからこそ、その他の関係者たちもついてきたといえる。菊池の天性の魅力と、佐佐木の管理能力。二人が生む相乗効果が、文藝春秋社と芥川賞・直木賞の成功につながったのである。

前章に続き佐佐木の仕事ぶりをみてきたが、こうなる佐佐木がとても無機質で、とっつきにくい人物のように思われるかもしれないが決してそうではない。小島の文章に、佐佐木の人柄が端的に表れているので引いておく。

彼は親切だ。しかし、何でも黙ってしてくる。僕が家を持った時、突然フラリとやって来て、二階の障子を八枚貼って行つてくれた。

僕が或雑誌へ趣味の改造を企てゝみると書いたら、何も云はずに西洋音楽会の切符を連続的に送つてくれた。それから……いや、挙げて行つたら切りがない。要するに、僕は彼の無言の親切と助力とに依つて、これまで幾度も精神的危機を凌いで来た。

佐佐木は自身の仕事を表に出すことを好まない性格だったのでないだろうか。恩を売るでもなく、ひけらかすでもなく、ただ黙々と自分のしたいことをしたいようにする。それを他人が知つていようがいまいが、佐佐木には興味のないことなのである。「何でも黙って」というのが、佐佐木の生き方なのだ。だからこそ、菊池のことも「黙って」支えたのである。そのために後世にその活躍がほとんど知られていないのであるが、それはそれで佐佐木の生き方に適っていたのかもしれない。

こと文藝春秋社内の経営面では、名前の出ない功績が多い佐佐木の仕事だが、芥川賞に関しては少々毛色が違う。選考も含め、佐佐木の名前が出るのがやや増えるのである。菊池の補佐といった役割を担った社内の業務と違い、芥川賞に向ける心持ちは佐佐木にとって特別なものがあつたのであろう。それはやはり、師であり兄のように慕つた芥川への並々ならぬ想いがあるからである。佐佐木は特別な人物の名が冠された文学賞を、どのような想いで育てたのであろうか。

『文藝春秋』昭和一〇年新年特別号に大々的に発表され

た「芥川・直木賞宣言」は先に挙げた通りだが、同時にそこには制定に携わった二名の言葉が載せられている。主催の菊池の言葉はもちろんであるが、委員に選出されている人物の中から佐佐木が代表して言葉を寄せているのである。菊池が表舞台に立っているところに、佐佐木が名を連ねるというのは珍しいことのように思う。少し長くなるが、掲載された二つの文章を比較してみたい。

まずは、菊池の文章である。

いつか「話の屑籠」に書いて置いた「芥川」「直木」賞を、いよく実行することにした。主旨は、亡友を記念する芳々無名若しくは無名に近き新進作家を世に出したいのである。だから、芥川賞の方は、同人雑誌の方を主として詮衡するつもりである。また広く文壇の諸家にも、候補者を推薦して貰ふつもりである。賞金は少いが、しかしあまり多く出すと、社が苦しくなった場合など負担になって、中絶する危険がある。五百円位なら、先づ当分は大丈夫である。賞金は、少いが相当、表彰的な効果はあると思つてゐる。現代ではあまりに、無名作家が多

いので、何等かのチャンスを作らないと、玉石共に埋まれるやうになる。この賞金なども多少その憂を絶つたらうと思つてゐる。当選者は、規定以外にも、社で責任を持つて、その人の進展を援助する筈である。審査は絶対に公平にして、二つの賞金に依つて、有為なる作家が、世に出ることを期待してゐる。⁽³⁴⁾

続いて、佐佐木の寄せた言葉をみていく。

この賞金が制定されるまでには、色々な試案があつた訳だが、其一つに、授賞を年一度にして、賞金を千円にしたらといふのがあつた。同じ金額を負担するにしても一度に二千円出した方が何となく派手であるが、一人に千円贈るよりは五百円づゝ四人に贈つた方が、「文運隆昌」に余計資し得るやうに考へられたから、発表されたが如く決定された訳である。本当に精進する気の人ならば五百円あれば、相当期間兎に角食つて書いて居られると思ふし、そして書いたら文藝春秋なり、オール讀物なりに掲載して、これに軽少ながら稿料を呈すから、これで

又暫く勉強が出来る筈だ。かうしてチャンスを与へられ
ても、それでも出られない人は、もう止を得ないであら
う。この度の文藝春秋社の善き企てで一人でも有力な作
家の出現を、早く見たいものである。⁽³⁵⁾

ここにも、前章で述べたような二人の関係が浮き上がっ
てみえる。菊池に比べ、佐佐木はより実務的な視点で芥川
賞制定に関して語っている。宣言にもあつたような、「文運
隆昌」の理念に触れ、授賞後の作家に対するアフターケア
に関しても、具体的に社としての援助の流れを表明してい
る。この頃には、菊池は『文藝春秋』の発行編集兼印刷人
の任を退いていたこともあり、菊池はあまり雑誌を編集す
るにあつての授賞後の援助体系について明言していない。

その穴を佐佐木は見事に埋めているのである。

しかし、これまで佐佐木の補佐的な役割も総合して菊池
が発言することが多かったにもかかわらず、芥川賞に関し
ては佐佐木が表舞台に進出してきている。第一回芥川賞選
評も、佐佐木のもは掲載されているが菊池のもは掲載
されていない。先に引用した永井や宇野の佐佐木に対する

評価も、芥川賞を存続発展させてきたことに関しては菊池
ではなく佐佐木の功績だとはつきりといっている。つまり、
芥川賞の構想は菊池の案であつたが、積極的に構築し世に
発表し、育ててきたのは紛れもなく佐佐木だったのである。
また、正賞を時計、副賞を賞金にしたのは、佐佐木が決め
たことだったという。

賞金だけというのが菊池氏の案でね、つまり日本文学
振興会という名前をつけるのが、なんとなく僕にいやな
気がしたように、現金だけというのは、なんとなくむき
出しみたいで、いやだ⁽³⁶⁾。

賞金だけあればよいというのは、菊池らしい率直な考え
であるが、それを「むき出しみたいで、いや」だと感じた
佐佐木は、賞の意義を象徴に求めているのではないだろう
か。食べる手段として小説を書くのではなく、文学をひと
つの文化として守っていこうという佐佐木の姿勢が感じら
れる。これは作家で挫折した佐佐木だからこそ、辿り着く
ことのできた到達点だつたのではないだろうか。その考え

が、正賞として採用されていることは、佐佐木にとって大変尊いことだったといえる。

佐佐木は芥川賞制定にあたっての自分の立場を、次のように語っている。

この両賞の生みの親は菊池氏——これは疑ひない。僕自身の気持では、僭越ながら、生みの母親ぐらゐのつもりであつた。それにさ、芥川といふのは、死んだとき、僕は生まれて初めて泣いたくらゐの人だもの。最も悲しんだくらゐ敬愛した人だし、(中略)二人に対してはひじやうなる親愛感をもつてゐたからね。もしそれほどの友情といふものがなかつたら、また違つたものだったかもしれない。⁽³⁷⁾

「育ての親」としないところが佐佐木らしいのではないだろうか。制定の段から携わり、なおかつ「母親」という「生み育てる」立場にあることを表明しているのは、それだけ自身の仕事を自負しているからであろう。それに加えて、「もしそれほどの友情」がなければ「また違つた」かも

しれないと自身でいつているように、社会的にも個人的にも影響力のある人物の名に恥じない働きをしなければいけないという想いが佐佐木を突き動かしたのである。

佐佐木は後年、芥川のことを回想し次のような文章を寄せている。

龍之介は漱石の死に逢つて「僕はまだこんなやりきれなく悲しい目にあつた事はありません。今でも思ひ出すとたまらなくなりますが」と手紙に書いてゐるが、わたしも龍之介の死に逢つてはじめて死のために慟哭した。「やりきれなく悲しい目」にあつて涙がとまらなかつた。「今でも」と龍之介の書いてゐるのは漱石の死後数年のうちの事であるが、三十余年を過ぎてなほどうかすると、わたしは目がしらのしめつてくるのを覚える。この遺墨集を拙文で汚すのも諸事因縁と重ねて大方の寛容をこひねがふ。⁽³⁸⁾

親の死にあつても流さなかつた涙を芥川のためには流し、「三十余年」が経つても悲しみがこみ上げるといふのは、

佐佐木にとっていかに芥川の存在が大きかったかを物語っている。また、これが昭和三五年の文章であることは注目すべきところである。芥川賞はこの時期にはすでに、後進の文学賞の手本になるほどの地位にまで登りつめている。佐佐木のいう「諸事因縁」には、芥川賞という仕事に対する自身の充実感が表れているように思われるのである。それほど、芥川と芥川賞の存在は佐佐木の人生の内で大きな割合を占めているのである。

では、佐佐木はどのような意識を持って選考に望んでいたのだろうか。佐佐木の選評の言葉から、それを読み取ることができるのではないだろうか。

五 選評分析——そこに込められた佐佐木の想い

佐佐木が選考委員を務めたのは、昭和一〇年上半期の第一回から昭和一七年下半年の第一六回までの計一六回である。第一一回と第一五回は、佐佐木の選評は書かれていないが、後の一四回分は選評を発表している。佐佐木の選評で目を惹くのは、芥川賞の制定時の規準を忠実に守ろうと

いう姿勢である。それが表れている佐佐木の選評を引用する。なお、引用文中の傍線は全て引用者によるものである。

第一回芥川賞選評 昭和十年上半期

授賞作：石川達三「蒼氓」

候補作：外村繁「草筏」、高見順「故旧忘れ得べき」、

衣巻省三「けしかけられた男」、太宰治「逆行」

佐佐木茂索

授賞作、候補作の価値その他に就ては、各委員の手配で尽きていよう。自分は、いわば事務的経過というものを記そう。

賞金制が発表されると同時に、文藝春秋社内に係りが置かれ、その手で「月評」の切抜が始められ、同人雑誌相互評の如きまで蒐集して参考に供した。一方、作家評論家の多数を手紙で煩してその意見を聞いた。其他は目に触れる限りの作品を読んだ。事は意外に面倒困難であった。

委員会の当初では坪田讓二、島木健作、真船豊氏等が問題になっていた。しかしこれらの人々は既に一般の鑑賞的となる舞台にその作品を発表しているのだから、それはそれでいいではないかという事になった。範囲はかくして、ずつと狭められた。

予選に残る作品が十篇位あつて欲しかった。それが半数に止まつたが止むを得ない。そして最後に、各委員の手記の如き意見が交されて石川達三氏に決定したのも先ず順当であらう。

之は余計な事であるが、委員の誰一人として石川達三氏に一面識だもなかつた事は、何か淨らかな感じがした。

第二回芥川賞選評 昭和十年下半年

授賞作：該当者なし

候補作：伊藤佐喜雄「面影」「花の宴」、檀一雄「夕張

胡亭塾景観」、小山祐士「瀬戸内海の子供ら

(戯曲)、丸岡明「生きものの記録」、川崎長

太郎「余熱」その他、宮内寒彌「中央高地」

佐佐木茂索

伊藤佐喜雄「面影」気配りの細かい作家。しかし「花宴」が十二月から始まつたばかり。十一年の上半期の終るまで待つて、すなわち第三次芥川賞の期間内に入れてよからん。

檀一雄「夕張胡亭塾景観」面白し。推すに吝かならず。

小山祐士「瀬戸内海の子供ら」昨年の出版。その前に一度発表されたものであるが。これを推すに吝かならず。以上二氏のいずれかへ。

丸岡明「生きものの記録」

川崎長太郎「余熱」その他

以上二君今さらの感なしとせず。芥川賞はこんなにも有名でない人へ。芥川賞は新鮮な空気を「垣の内」へ入れるために存在せよ。

第三回芥川賞選評 昭和十一年上半期

授賞作：鶴田知也「コシヤマイン記」、小田嶽夫「城外」

候補作：打木村治「部落史」、高木卓「遣唐船」、北條

民雄「いのちの初夜」、矢田津世子「神楽坂」、

緒方隆士「虹と鎖」、横田文子「白日の書」

佐佐木茂索

矢田津世子氏の「神楽坂」はうまいものだ。こんなにうまいとは思っていなかった。しかし、やや陳い、それに登場人物がやや死んでいる。緒方隆士氏の「虹と鎖」は相当な作品。作者の加餐を望む。北條民雄氏の「いのちの初夜」は最初評判を聞いた時には題材だけのものかと考えていたが、読んでみたら作家的手腕十分で、立派に通る作品だ。高木卓氏の「遣唐船」は苦心の力作。

「コシヤマイン記」は面白かった。鷗外の或種の翻訳物を読む感じがあった。「城外」はいまだしの感ありと席上で云つたら、行き過ぎている位永い事書いている人だという事で驚いた。この「城外」の当選はやや幸運の感なくもなし、今にして、前回しやにむに檀一雄を薦すのだつたと思う。

第七回芥川賞選評 昭和十三年上半期

授賞作…中山義秀「厚物咲」

候補作…田畑修一郎「鳥羽家の子供」、澁川驍「龍源寺」、

伊藤永之介「鴉」「鶯」、中村地平「南方郵信」、

丸山義二「田植酒」、一瀬直行「隣家の人々」、

秋山正香「般若」

佐佐木茂索

「鴉」に感心した。しかし「鴉」の作者は既に数冊の著書を持ち、押されもしない一人前の作家である。授賞はもつと知られていない人を目標にすべきであろう。授賞するとせば、「梟」の時代にすべきであつたらう。丸山義二「田植酒」、大原富枝「祝出征」などうまいものだ。

第十四回芥川賞選評 昭和十六年下半期

授賞作…芝木好子「青果の市」

候補作…水原吉郎「火渦」、野川隆「狗宝」

佐佐木茂索

「火渦」も捨て難い。しかし、二つに一つとなると「青果の市」を採らう。

曾て「双流」を書いた此の作者は、「青果の市」で確実な成長を示している。言い過ぎてよいものなら、更に次の成長を約束しているとも言える。少くも勉強を続ける人だとは言つてもよさそうに思える。

「青果の市」の甲斐甲斐しい女主人公を描いた前半には格別云うべき事もない。二人の青年の理屈めいた会話のあたりには肉付けの乏しさを感じさせる。「火渦」は悲惨事を描いて、しかも時に甚だ美しい。本来は美しさをこそ描くべき作者でもあろうか。

直木賞に就ては他に書く人があるう。ざっと書くと、二三の作品を挙げて挙げられないわけではなかったが、異見に刃向うてまでという作品はなかつた。⁴³

「無名若しくは新進作家の創作中最も優秀なるものに呈す」という、制定宣言の文言に佐佐木はこだわっている。

特に、第一四回の「青果の市」に対する選評は、制定当初から佐佐木の考えが変わっていないこと表している。先に引用した「委員として」の中に書かれているが、「本当に精進する気の人なら五百円あれば、相当期間兎に角食つて書

いて居られると思ふし、そして書けたら文藝春秋なり、オール讀物なりに掲載して、これに軽少ながら稿料を呈すから、これで又暫く勉強が出来る筈だ」という考えを持ち続けているのである。精進しながら書き続けていく人材が作家としてふさわしいという考えが、佐佐木の中には常にあった。これは、佐佐木自身が芥川に指摘され続けてきた根気や努力の大切さに通じる部分である。佐佐木は文筆生活から離れてやつと、この言葉を自分のものにするのできたのである。芥川の作家観を継承し、きちんと後世に伝えてこうという意志が、佐佐木の選評からは感じられる。この時、佐佐木は芥川が自分にしてくれていたように、後進を育てていこうとしていたのである。

また、注目すべきは第八回の選評である。

第八回芥川賞選評 昭和十三年下半年

授賞作：中里恒子「乗合馬車」その他

候補作：北原武夫「妻」、吉川江子「お帳場日誌」、外

村繁「草筏」（但し「草筏」は池谷信三郎賞受賞

作として最終候補から除外された）

佐佐木茂索

候補作品十数篇を読んで、僕は外村繁氏の「草筏」に心を決めた。ところが第一回委員会の時「草筏」が池谷賞に決定した事を知った。運不運はここで分れる。

池谷賞を受賞した作品が除外されたことに關して、佐木は「運不運」だとしている。しかし、川端康成は同じ第8回の選評で次のようにいつている。

賞が二重になつても、私は尚この作品を芥川賞に取りたかつたが、私は池谷賞の委員をも兼ねているので、自分から進んで同一の作品に賞を出すということは、幾分躊躇する意味があつた。もし池谷賞に關係のない他の委員たちが、二重賞差支えなしとしてくれたならば、私は無論この作品を推したであらう。

つまり、「差支えなし」とならなかつたのである。「草筏」に「心を決め」ていた佐佐木でさえ、同意しなかつたので

ある。これは単に「運不運」で片付けられる問題ではない。芥川賞の規定には、二重賞禁止の項目は設けられていない。状況としては、池谷賞を受賞したからといって、芥川賞を授賞してはいけないということはないのである。

ここには、芥川賞の權威を守る意識が感じられる。單純に、他の賞を取つた後に芥川賞、ということでは芥川賞の面目が立たない部分がある。また、池谷賞を取つたということは、ある程度文壇に認められたという事実ができるのであり、これもやはり「無名若しくは新進作家の創作中最も優秀なるものに呈す」という規定に反する。新風を發掘するという目的からいえば、すでに發掘されてしまつたものに芥川賞は与えるべきではないのである。そして、「文運隆盛」の観点からいえば、一度も賞の類を受けたことのない作家に与えることは、その一助になると考えられるのである。

選考委員を務めた間に、彼がこのような態度を崩さなかつたことが、芥川賞の選考基準の軸をより堅固なものにして以後に残したといえるだろう。間違ひなく、佐佐木は制定当初から芥川賞を向かうべき道、つまり「文運隆盛」の

一助となるべく価値ある文学場にするという目標に向けて一本の筋を通し、「生みの母」として立派に芥川賞を独り立ちさせたのである。

〔注〕

- 1 『文藝春秋』では、一九二五年年一二月号において、懸賞小説を募集している。芥川賞・直木賞と同様、新進作家の発掘を目的としたものであり、甲一篇に二百円、乙一篇に五〇円を贈呈するという小規模のものであった。これ以降、懸賞小説の募集はたびたび行なわれたが、「締切後にも、ドシドシやって来て」「全部読了まで時間がかかり、選考の規定も曖昧になっていった(『文藝春秋』一九二六年二月号)。芥川賞・直木賞はこの懸賞小説の課題を解消し、新たなスタイルを提示したものであるといえるだろう。
- 2 『芥川賞全集 第一巻』(一九八二年二月二五日、文藝春秋社)
- 3 菊池寛「半自叙伝」(『菊池寛全集 第二十三巻』(一九九五年二月二〇日、高松市菊池寛記念館刊行、文藝春秋発売))
- 4 注3に同じ。

5 菊池寛「創刊の辞」(『菊池寛全集 第二十四巻』(一九九五年八月三〇日、高松市菊池寛記念館刊行、文藝春秋発売) 初出は『文藝春秋』一九二三年一月号)

6 菊池寛「文藝春秋」編輯記文集(昭和二年九月)(注5『菊池寛全集 第二十四巻』に同じ)

7 菊池寛「文藝春秋」編輯記文集(昭和二年十月)(注5『菊池寛全集 第二十四巻』に同じ)

8 大西良生編「菊池寛年譜」(注5『菊池寛全集 第二十四巻』に同じ) 参照。

9 注3に同じ。

10 菊池寛「文藝春秋」感想文集(雑記 一) 流行作家の弁(注5『菊池寛全集 第二十四巻』に同じ)

11 菊池寛「文藝春秋」編輯記文集(昭和三年一月)(注5『菊池寛全集 第二十四巻』に同じ)

12 菊池寛「文藝春秋」編輯記文集(大正十二年一月)(注5『菊池寛全集 第二十四巻』に同じ)

13 佐佐木茂索「私史稿——「文藝春秋三十五年史稿」跋に代へて——」(『佐佐木茂索 隨筆集』一九六七年二月一日、

文藝春秋)

14 野島辰次「茂索さんの事 時事退社に際して一言」(『文藝春秋』大正一四年一一月号)

15 注13に同じ。

16 書簡「大正十年 九七三 十一月二十五日 消印二十四日

京橋区鍋町時事新報社内 佐々木茂索様 十一月二十五日

芥川龍之介」(『芥川龍之介全集 第十一卷』一九七八年六月二

二日、岩波書店)

17 佐佐木茂索「文藝春秋三十年の思ひ出——小林秀雄 吉

川英治 川端康成 宇野浩二 永井龍男諸氏との座談会——」

(注13『佐佐木茂索 随筆集』に同じ)

18 注13に同じ。

19 菊池寛「『文藝春秋』編輯記文集(昭和五年七月)」(注5

『菊池寛全集 第二十四卷』に同じ)

20 松本清張「形影 菊池寛と佐佐木茂索」(一九八二年一〇

月三〇日、文藝春秋)

21 佐佐木茂索、池島信平、嶋中鵬二「佐佐木茂索—わが生涯

を顧る(対談)」(『現代日本文学大系』45 水上瀧太郎 豊島興

志雄 久米正雄 小島政二郎 佐佐木茂索集』一九七三年八月

三〇日、筑摩書房)

22 小島政二郎「佐々木茂索」(『文藝』一九七八年一一月号、河出書房新社)

23 注22に同じ。

24 注20に同じ。

25 永井龍男「十周年前後」(『文藝春秋三十五年史稿』一九五

九年四月八日、文藝春秋新社)

26 「『文藝春秋』編輯記文集(昭和七年二月)」(『菊池寛全集

第二十四卷』一九九五年八月三〇日、文藝春秋)

27 注21に同じ。

28 注21に同じ。

29 菊池寛「『文藝春秋』編輯記文集 十五周年に際して」(注

5『菊池寛全集 第二十四卷』に同じ)

30 注13に同じ。

31 永井龍男、佐佐木茂索「芥川賞の生れるまで(対談)」(『回

想の芥川・直木賞』第四刷、一九九〇年九月二〇日、文藝春秋)

32 宇野浩二「回想の芥川賞——失敗と失意つづき記——」

(『別冊文藝春秋』第二十九号、一九五二年八月二五日、文藝

春秋新社)

33 小島政二郎「ポーチの前の彼」(『新潮』一九二六年四月号)

特集「新進作家の人と作との印象（其の一） 佐佐木茂索氏の印象」より。

3 4 菊池寛「審査は絶対公平」（『文藝春秋』一九三五年新年特
別号）

3 5 佐佐木茂索「委員として」（注3 4『文藝春秋』に同じ）

3 6 注3 5に同じ。

3 7 注3 5に同じ。

3 8 佐佐木茂索「芥川龍之介遺墨」あとがき（注1 3『佐佐
木茂索 隨筆集』に同じ）

3 9 「第一回芥川賞選評」（注2に同じ）

4 0 「第二回芥川賞選評」（注2に同じ）

4 1 「第三回芥川賞選評」（注2に同じ）

4 2 「第七回芥川賞選評」（『芥川賞全集 第二卷』第二刷、一
九八二年三月三〇日、文藝春秋）

4 3 「第十四回芥川賞選評」（『芥川賞全集 第三卷』一九八二
年四月二五日、文藝春秋）

4 4 「第八回芥川賞選評」（注4 2『芥川賞全集 第二卷』に同
じ）

4 5 注4 4に同じ。